

## 「戦闘」は9条上問題、「衝突」使う

# 稲田氏が発言 野党反発

南スーダン

南スーダンの国連平和維持活動(PKO)に参加する陸上自衛隊が現地情勢を伝える日報で「戦闘」があったと記していた問題で、稲田朋美防衛相は8日、「戦闘行為」の有無をめぐる「事実行為としての殺傷行為はあったが、憲法9条上の問題になる言葉は使うべきではないことから、武力衝突という言葉を使っている」と述べた。

▼3面Ⅱにじむ違憲回避、12面Ⅱ社説

衆院予算委員会で、民進

党の小山展弘氏の質問に答えた。

憲法9条に基づくPKO参加5原則は「紛争当事者間の停戦合意」を条件に定めており、「国際的な武力紛争の一環として行われる、人を殺傷し、または物を破壊する行為」と定義される「戦闘行為」があると政府が認めた場合はPKOに参加できない。

民進など野党4党は稲田氏の発言について、「言い換えたら9条違反を免れる

というのは言葉遊びで、国民を欺きかねない答弁だ」(民進の山井和則国会対策委員長)などと反発。予算委で集中審議を行うよう求め、稲田氏を追及する方針を確認した。

予算委で稲田氏は、「戦闘が生起」などと書かれた陸自の日報について、「法的意味における戦闘行為ではないが、武力衝突はあった」と説明。PKO参加5原則には反していないとの考えを強調した。

(石松恒)

# 陸自日報「戦闘」を「戦闘行為でない」

## 稲田氏強弁 にじむ違憲回避

南スーダンで国連平和維持活動(PKO)に当たる陸上自衛隊が日報で「戦闘」があったと報告した問題をめぐり、8日の衆院予算委員会では、稲田朋美防衛相が「法的な意味で戦闘行為はなかった」と強調。現地情勢をもとに「戦闘があった」と主張する野党は、「参加ありきた」と批判を強め、PKO問題が国会論戦の焦点に浮上した。

### 野党「参加ありきたり」

防衛省が公開した陸上自衛隊の日報などの文書を元に、民進党の小山展弘氏が稲田氏の認識をたどした。「戦車を用い、迫撃砲を使った戦闘があると書かれている。戦闘があったことを認めるか。同省が「廃棄した」と開示を拒んできた文書には「戦闘」という言葉が繰り返して使われていた。稲田氏は「法的意味における戦闘行為は、国際的な武力紛争の一環として行われる殺傷・破壊行為」との政府見解を繰り返して、「い」からその文書で「戦闘」という言葉が一般的用語として使われたとしても、法的な意味における戦闘行為ではない」と答えた。



答弁する稲田防衛相

### PKO5原則と南スーダンでの「戦闘」の評価

PKO参加 5原則	①紛争当事者間の停戦合意 ②紛争当事者の受け入れ同意 ③中立性の維持 ④上記の原則が満たされない場合の撤収 ⑤武器の使用は必要最小限度	
	政府の見解	野党の指摘
戦闘についての評価	「駆けつけ警護」を付与した部隊の派遣を決めた昨春秋 (9月30日の衆院予算委)	270人の死者が出たと言われ、国が連施設にも砲弾が撃ち込まれ、多くの死傷者が出た。(他国の)PKO部隊にも死者が出た。PKO5原則は揺らいでいる。(民進・辻元清美氏)
	派遣部隊の日報など(今回(今月8日)はあつたが、国際的な武力紛争の一環として行われていない。法的意味における戦闘行為ではないが、武力衝突はあった(稲田朋美防衛相)	などが明らかになった(衆院予算委)激しい戦闘があれ、ほぼ内乱状態になった。PKO5原則に反するものはPKO5原則を検討しないような状況だった(民進・小山展弘氏)

### 派遣条件譲れぬ一線

なぜ、稲田氏は陸自の日報上の「戦闘」を認めながら、「戦闘行為」があったら、一行使を禁じる。そのための憲法9条は海外での武力行使を禁じる。そのための

小山氏からさらに「苦しい答弁だ。『戦闘』という言葉を使って自衛隊が報告しているのか」と追及される。稲田氏は「法的な意味で戦闘行為はなかった」と主張する野党は、「参加ありきたり」と批判を強め、PKO問題が国会論戦の焦点に浮上した。

政府は自衛隊をPKOに派遣する際、戦闘行為に巻き込まれたとみなされないように細心の注意を払ってきた。政府の定義では、戦闘行為とは「国家または国家に準ずる組織(国準)間の紛争の一環として行われる人を殺傷し、または物を破壊する行為」だ。

昨年7月にあった大統領派と前副大統領派の大規模戦闘は、数百人規模の死傷者が出たが、政府は「前副大統領派は支配系統や領域を有している勢力ではない(稲田氏)として、国準に当たらないと判断。このため、大規模な戦闘が起きていなくても国際的な武力紛争には該当せず、自衛隊の活動も憲法が禁じた武力行使に当たらないとの立場に立つ。

稲田氏が「意味があるのは法的な意味での戦闘行為かどうか」と強弁し、実際の情勢より法的な評価を優先する姿勢をにじませるのはこのためだ。

防衛省幹部は「こっちは法律面でかわすだけ。鉄壁のディフェンスだ」と自信を見せる。(南彰、相原亮)